# 「キリストの体を壊す思い上がり」

（ローマ12：3～8）

2019.8.25

先週はお休みをいただいて、私は辻堂教会の礼拝に出席してきました。礼拝前、何も言わずに行ったものですから、後ろの席に座っていると、気づいた島津先生がやって来まして、「言ってくれたらいいのに。再臨のイエスさまが来られたかと思った」と。そんなことを言われたのは初めてでした。辻堂教会に行った一つの目的は、2年前に新しい会堂が建ったばかりの教会堂を見学するためです。私たちの教会の新会堂の設計において、辻堂教会を参考にさせていただき、特に礼拝堂について、講壇を中心にしてぐるりと取り囲むようにして個別椅子を配置する、そのことを見たくて行ってまいりました。これまで、写真や図面を見て想像するだけでしたが、実際に礼拝に出席してみて、縦長の座席よりも説教者との距離が近くていいなあ、とさらに楽しみになりました。もう一つの目的は、結婚して向こうへ行かれた島津愛姉に会うためであります。愛さんからは、「新会堂のために祈っています。教会の皆さんによろしく」とのことでした。

夏休みが終わり、教団委員会では、明日から1泊2日で会議を行います。毎年この8月下旬の1泊2日の教団委員会から、次年度の任命協議がスタートいたします。今年は3年に一度の、全ての教会、全ての牧師が「任命に関する要望書」を提出する年です。教会の中には、牧師の交代を願い出ている教会があり、あるいは、「もうこの教会では奉仕を続けられない」と転任を願い出ている牧師があります。悲しいことに、牧師と信徒、あるいは役員会が対立し、それがもう修復不可能で、どちらかが教会を去るしかないところにまで至ってしまっている、ということがあります。教会が、高齢化とか財政問題で立ちゆかなくなるのでなく、内側から崩れていくという現実があります。

パウロが手紙を書き送った教会でも、しばしば教会内で対立が起こり、それが教会を内側から崩すような、教会の命を失わせるようなことが起こっておりました。よく知られているのがピリピ教会で起こっていた対立であります。ピリピ人への手紙の4章で、**「わたしはユウオデヤに勧め、またスントケに勧める。どうか、主にあって一つ思いになってほしい」**（2）とパウロが語っています。二人の有力な女性同士の対立が教会全体を巻き込んで、主の教会を傷つけておりました。キリストの教会において、なぜこのようなことが起こってしまうのでしょうか。何が原因で、何が問題でこのようなことが起こってしまうのでしょうか。今日の箇所は、そのことについての一つの答えのようなことが書かれている大事な箇所であります。

12章に入り、これまで1、2節を4回にわたって話してまいりました。この最初の部分は、後半のキリスト者の倫理を語る上での大原則を述べている部分です。そして今日の3節から、具体的な勧めが語られ始めます。3節には、**「わたしは、自分に与えられた恵みによっ**

**て、あなたがたひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである**」。パウロが真っ先に語るのは、「思い上がるな」「傲慢になるな」ということでした。新共同訳では、「自分を過大に評価してはなりません」とありますし、最新の聖書協会共同訳では、「**分を越えて思い上がることなく**」と訳されています。このように語るのは、キリスト者がしばしば、分を越えて思い上がってしまうことがあるからでありましょう。

ただ、私が最初にここを読んだとき、なぜパウロはこのことを真っ先に語ったのだろうか?と疑問に思ったことでありました。「思い上がる」なんてことは、それほど大した問題ではないように思ったからです。それよりも、もっと先に語るべきこと、忠告すべきことがあるのではないか?と最初は思った。しかし、よく考えてみますと、これこそ真っ先に語られなければならないことであると思いました。なぜなら、この「思い上がり」というものが、キリストの体としての教会を破壊させてしまう、教会から命を奪い、教会が教会でなくなってしまう、そういう力を与えてしまうからです。

主イエスが十字架につけられる前の夜、あの最後の晩餐の席で、12弟子たちがやっていたことは、「誰が主イエスの一番弟子か」という言い争いでありました。主イエスがまもなく十字架にかけられようとしていた大切なとき、主の弟子たちはお互いに、自分こそ一番偉い、と思い上がって、それによって争いが生じていた。主イエスが十字架の死という最も低いところへと降られようとしていたとき、弟子たちは、下を目指すのではなく、上を目指し、しかも誰よりも上に立とうと争っていました。そのように分を越えて思い上がるとき、主を中心とした交わりが破壊されてしまう。

このとき、パウロがこう語るのは、ローマ教会の中にも、分を越えて思い上がる人がいたからでありましょう。人間である限り、どのような集まりの中にも、自分を大きく見せようとする人がいるものであります。自分を過大評価して、他の人よりも自分が上に立とうとする。特に、男性にはそういう弱さがあって、それによって自分の立場や地位を築こうとする。そのため、そのようなことに慣れてしまっている人は、「教会といっても、所詮、人間の集まりなのだから仕方がない」と思って諦めてしまうかもしれません。あるいは、これはその人その人の性格や人間性の問題であって、牧師が説教でとやかく言っても、これはどうしようもないのだ、と思うかもしれません。

しかし、私は決してそうは思わない。パウロがキリスト者の倫理を語り始めるにあたり、わざわざこのことを冒頭で語っていますのは、これが決して人それぞれの性格や人間性の問題ではないからです。確かに、人によっては、人の上に立つタイプの人、リーダーの性格を持った人がいます。しかし、パウロがココで指摘しているのは、これは極めて信仰の問題です。パウロはここで、世の中の一般倫理と同じようなことを、「謙遜を身につけましょう」というようなことを述べているのではなく、信仰の問題としてこれを語っています。この

「思い上がり」が信仰の問題であるという認識を欠いていることが、教会にとっても一つの大きな問題であろうかと私は思っています。「その人の性格の問題だから」とやり過ごしにしてしまうために、教会が内側から崩れていく、ということが起こってくる。

パウロは4節から8節にかけて、教会という共同体がどのようなものなのかを語ります。ここで書かれていることは、第一コリント12章で詳しく書かれている内容とほとんど同じであります。4節で、**「なぜなら、一つのからだにたくさんの肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように」**。パウロは手紙の中で、いつも教会というものを人間の体にたとえて説明しています。教会というものは、**「一つのからだ」**である、と言う。

人間の体には、手や足をはじめ、さまざまな器官があるように、教会に連なる私たち一人一人は、体を形づくる器官であるという。私たちの体というものは、それぞれの器官が自分の役目を果たすことによって日常生活が滞りなく保たれているものです。皆さんの中には、年とともに、体のいろんな部分の機能が衰えていき、生活に支障が出ている、という方も多くおられるでしょう。どれ一つとっても、どうでもいい器官などはなく、どれも大事。どれが弱っても困ってしまう。足や膝が痛むと、運動不足になり、それによって体重が増えてしまい、それによって血圧が高くなったり、内蔵に不具合が出てきてしまったりする。教会に連なる一人一人は皆、からだを構成する大切な部分であり、それぞれが正常に働いてくれることによって、教会の働きが守られている。その意味では、教会では一人一人が大切な存在であり、そこには上も下もない。

ココで最も大事なのは5節の言葉です。**「わたしたちも数は多いが、キリストにあって一つのからだであり」**。新共同訳聖書は、**「キリストに結ばれて一つの体を形づくっており」**とあります。教会とは、建物を指すのではなく、キリストにあって一つのからだを造っている、一つの共同体をキリストにあって形成している。この**「キリストにあって」**とは、**「キリストに結ばれて」**ということです。このローマ人への手紙では、6章でこのことが集中して語られてきました。私たちがイエス・キリストを神の子救い主と信じ、バプテスマ、洗礼を受けるとき、それはキリストと一つとなる、キリストと結びつく洗礼を受けるのだ、ということでした。そのように、洗礼によってキリストと一つに結ばれた一人一人が、キリストの体としての教会の一員となる。キリストに結ばれた一人一人がココにいる。そして、みんなでキリストの体、教会を造っていく。「イエスは主」と告白する者たちによって、一つのからだとしての教会が造られる。

教会が「キリストのからだ」ということは、表現をひっくり返すならば、キリストは「教会のかしら」ということです。私たちの体の各部分が、頭から、脳から信号が送られて、それによって動いているように、キリストのからだとされている私たちは、かしらであるキリストに従い、キリストに御心によって仕えて生きる者たちです。それが、「イエスは主なり」という信仰告白の意味するところです。「私た

ちは、かしらであるイエスを私たちの主人として従います」という告白です。

そのように、キリストのからだを形成する一人一人の働きについて、6節から8節にかけてこのように語られています。「**このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである**」。ここは、それぞれが神から異なる賜物を与えられていると言っている。その自分に与えられた賜物をもって、キリストの体である教会に仕えるように、という勧めです。6節の「**預言**」とか8節の「**勧め**」というのは、今日で言うところの説教の務めだと言われています。そのほか、教会の働きとして、奉仕、教え、寄附、指導、慈善活動などが挙げられている。ここで言おうとしていることは、一人の人があれもこれも全部やるのではなく、それぞれが自分の賜物を持ち寄って、それを活かし、役目を果たしていくことによって、教会は機能していくのだ、ということです。

ですから、聖書によれば、教会には、基本的には「お客さん」はいない。求道者の方や、あるいは旅行中でたまたま礼拝に出席した、という方は確かにお客さんでありますが、しかし、信仰者として、この一つの共同体に連なるとするならば、誰一人として、お客さんはいない。みんな、キリストの体の一部分であり、教会を建て上げるために、神さまが皆さん一人一人をココに置いておられる。体の大切な一つの部分として、賜物を与えられてココでキリストに仕えるようにと場を与えておられる。ですから、「自分は関係ない」というようなお客さんは誰一人としていない。私がそう思うかどうか、ではなく、神さまが一人一人をココに遣わしておられる。

6節に「**このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので**」とあります。神さまが、教会に連なる一人一人にそれぞれ異なる賜物を与えておられる、と言う。それらは、何よりも教会のために用いるようにと、神さまが私たちに与えてくださった賜物だと言う。その賜物は、全ての人に公平に、一律に同じようなものが与えられているというのではなく、それぞれが違う賜物が与えられていると言う。違っているからいい。違っているからこそ、お互いを必要とする。それぞれの部分が自分の役割を果たすことによって、一つの体として機能する。コリントの手紙ではそのことをこう言っています、「**もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかぐのか**」（第一コリント12：17）。賜物が違う、いろんな人が集っているからこそ、教会が教会として機能していく。

神さまが、必要があって、一人一人それぞれに違う賜物を与え、ココに遣わしておられるとするならば、そのお互いの間には、上も下もないはずであります。誰の賜物がより価値があって、信仰者としてランクが上だ、ということはない。思い上がって、自分は他の人よりも

偉い、他の人よりも大切な存在だ、と考えるはずがない。みんなが、一つに体に属する者として、お互いの働きとお互いの存在を尊重する。これがキリストの教会の姿です。私たちの教会の場合、いいなあと思うことは、威張る人がいない。おそらく牧師が一番威張っているのであって、皆さんの中に威張る人がいない。むしろ、私たちの教会の課題は、ここでパウロが言っている「思い上がり」よりも、「思い下がり」の方が問題があるのかもしれない。他の人と比べて、「私は○○さんのようなことはできない」と思い下がってしまう。思い上がるか、思い下がるか、上下の方向性は違っても、問題の本質は同じであります。天の神さまが、キリストのからだである教会の仕えるために、恵みによって賜物を与えていてくださっている、ということを忘れてしまっている。私に賜物を与え、今ココに遣わしておられる神さまとの関係よりも、他の人を見て、自分が上か、下かを気にしてしまう。人と比べてしまう。思い下がりも決してよくない、それは与えられたタラントを土の中に埋めてしまうようなものであります。

ただ、教会の中で特に大きな問題となりますのは、思い上がってしまう人の存在です。自分の賜物を特別視して、他人に対して優越感を持って、見下げてしまう人が出てくる。悲しいことに、教会の中でさえ、世の中の価値観がそのまま入り込んできて、世にあって活躍している人が教会の中でも偉いかのように、本人も周りも考え始めてしまうことがある。パウロが、**「思うべき限度を越えて思いあがることなく」**（3）と語ったのは、ココでは直接は言わないものの、ローマ教会から聞えてくる様々な人の姿を思いながら書いたのでありましょう。そのように、自分は他の人よりも上であるかのように思い上がることは、キリストの体である教会を内側から壊してしまう。

なぜそれほどまでに、「思い上がる」ということは問題なのでしょうか。それは、自分がみんなの上に立って、そこの主人になろうとする、自分がここでの支配者になろうとすることだからです。これは、組織における役割として、何かのリーダーになるとか、長になってみんなをリードすることそのものを否定しているのでは決してありません。問題にしているのは、自分が教会の支配者になろうとしてしまうことです。自分の思い通り、考えのとおりに周りを動かそうとする、全体を動かそうとする。ワンマンな経営者がトップに立つ会社などはそのようなものでしょう。しかし、教会にあっては、それは決して許されない。なぜなら、教会のただ一人の主人は、救い主イエス・キリストだけ、だからです。思い上がることは、主人であるイエスに成り代わろうとすること。教会にとってこれほど致命的なことはない。なぜなら、「イエスは主」ではなくなってしまうからです。教会がみんなで「イエスは主なり」と告白することは、私たちのうちの誰ひとり、人間に過ぎないものが主人になってしまう、支配者のように生きてしまうことはいたしません、ということです。かつては、自分が主人であるかのような生き方をしていましたが、今や私は、自分が主人ではなく、ただキリストだけを主人として仰いで生きていきます、と

いう告白。そのように告白した者たちが集まっている教会において、この群れの中で誰かがキリストに代わって人間に過ぎない者が思い上がって主人として振る舞おうとするならば、それはもはや、「イエスは主」と告白する教会ではなくなってしまう。

　これほどまでに重大なことが起こっているのに、実際の教会では、そのことを許してしまっている、そのまま見過ごしにしてしまっていることが多い。教団委員会に届く教会の様々な問題も、突き詰めると、「イエスは主」と告白する礼拝が真実なものとなっていない、これに尽きるなあと思います。人間に過ぎない者が主人になろうとしている。イエス・キリストがどこかに行ってしまっている。そして、教会の中で主人になろうとする人は、大抵、有能な人が多いのです。教会でも、役員などをつとめて、多くの働きを担っていることがある。そのために、小さな教会ほど、その人を中心にして実際の教会が運営されている。それによって、確かに教会は助けられている、支えられているという側面があります。けれども問題なのは、その人がいつの間にか思い上がってしまう。自分が考えていることがいつも正しいと思ってしまう、そして、みんなは自分の意見に従うべきだと、意見を押し通そうとする。いつの間にか、キリストではなく、その力ある人がその教会の主人になっている。これは牧師も同じです。牧師がパワハラまがいの、力づくで言うことを聞かせようとすることがある。

　パウロがピリピ教会に宛てた手紙の中で、**「わたしはユウオデヤに勧め、またスントケに勧める。どうか、主にあって一つ思いになってほしい」**（ピリピ４：２）とパウロは勇気をもって名指しで語りました。手紙の中でわざわざそういうことを名指す、ということはすごいことですよね。それでも、そこまでしなければならない、これを言わなければ教会が崩れてしまうと思ったのでありましょう。非常に能力のある二人の女性が、互いに対立し、それが教会全体を巻き込んで、教会が二つのグループに分断されてしまっていたようであります。あえて、二人の名前を直接あげて、**「主にあって一つ思いになってほしい」**と告げた。それぞれユウオデヤもスントケも自分がそこの中心になろうとするのではなく、ただイエスだけを主人と仰ぐ、本当の信仰に立って欲しいと呼びかけた一あなた方がそうしてくれなければ、ピリピの教会は、キリストの教会でなくなってしまう。パウロの必死の訴えでありました。

　そのピリピに宛てた手紙の中で、パウロはあの有名なキリストの謙遜を語りました。**「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」**（２：６～８）。私たちが主と仰ぐキリストは、私たちのために最も低いところへ降ってくださったお方ではないか。十字架の死に至るまで、下へ下へとひたすら降りてくださったお方ではないか。そのキリストの謙りによって私たちは今このように生かされている。だからこ

そ、キリストの十字架によって救われた私たちは、キリストを主と仰ぐ私たちは、それまでの上へ上へと目指す歩みから向きが変わり、お互いに相手のために仕えて生きる、今度は下へと向かう歩みを始めたではないか。「イエスは主」と告白し仰ぐ者たちは、生きる方向性がもう変わってしまったのだ。もう上を目指す歩みではない。キリストのように自らを低くし、下へと向かう歩みを私たちは始めているではないか。

皆さんいかがでしょうか、それぞれ自分を振り返ると、自分の中にも、本当は支配者でありたい、自分が中心に立ちたいという思いがある。そこでこそ、信仰者としての本物の服従が求められます。「私にとって、本当に『イエスは主』」と言いうるか。そのようなときにこそ、そのことに気づいたときにこそ、「私ではありません。あなたこそ私の唯一の主です」と告白する。そう私たち一人一人が告白することによって、それは周りの人たちを生かすことになる。その告白が教会を生かすことになる。

この毎週の礼拝は、私たちが繰り返し向きを変えるときであります。自らが主人になろうとする自分を見つめながら、そこでなお「イエスは主」と告白していく。この週もどうぞあなたが私の主人でいてください。あなたの僕として神と人に仕える者とさせてください。

「イエスは主」と告白する私たちによって、これからも、ココにキリストの教会が建て上げられてまいりますように。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、御名を讃えます。パウロが、「**兄弟たちよ、そういうわけで**」と勧めているように、神の恵みによって救われた私たち、キリストと一つに結ばれた私たちは、もはや上を目指す歩みではなく、思い上がることなく、キリストと同じところ、下へと目指す歩みへと招かれていることをありがとうございます。どうぞ私たちの仕える教会が、ただキリストだけを主人として仰ぐ教会とさせてください。それぞれ役割が違います。それぞれ与えられている務めを果たしながらも、ただキリストだけが讃えられる、そういう教会、お互いが生かされていくところの尊ばれていくところの教会とさせてくださることをお願いをいたします。

私たちは新しい会堂と願い、働きを勧めています。一つ一つの事柄をあなたが守ってくださり、また一切の必要を満たし続けてくださいますようにお願いいたします。

暑さが続きます。体調不良の方々、困難を覚えている方々をあなたが支え、癒やし、また来週、この礼拝の場へとお返しくださいますことをお願いいたします。

東北教区の五つの教会の上に、弘前、三沢、築館、仙台、福島、それぞれの教会を祝福し、立てられている先生方の働きをお守りくださいますことをお願いいたします。

教団では次年度の働きや計画が進められようとしています。中には痛んでいる教会、痛んでいる牧師の方々がおられますけれども、どうぞ憐れんでくださって、キリストによる癒やしと励まし、支えがありますようにお願い

いたします。

世界において国々が争います。自分たちこそ主人であると主張している中にあって、どうぞ互いの国のために仕え合う、お互いが健やかに生きる、そういう国際関係を築いていくことができるように憐れんでくださることをお願いいたします。

主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師　佐藤信人）